

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370162

研究課題名(和文) 17～19世紀における日本・オーストリアの大道芸の歴史的変質に関する比較研究

研究課題名(英文) The Development of Street Performing Arts in Japan and Austria during the 17th to the 19th Centuries

研究代表者

Gerald Groemer (GROEMER, Gerald)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：50303392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では主に元禄頃以降の江戸と18世紀後半～19世紀前半のウィーンの音楽文化、とくに一般社会あるいは下層階級の芸能に焦点を合わせ調査・分析した。研究を遂行するために数多くの日記、古文書、随筆などの史料を発掘し、両市のそれぞれの事情を明らかにした。

ウィーンの事情を調査するにあたり、未刊の資料であるマティアス・ペルトの膨大な手記を発見したことは、この研究の大きな成果のひとつといえる。江戸はウィーンと同様、社会の階層により音楽文化が異なることを具体的に示すことができた。この研究に基づき単著一冊あるいは学術論文三編を刊行した。

研究成果の概要(英文)：This research treated the cultures of musical performance in Edo after the eighteenth century and Vienna during the late eighteenth and early nineteenth centuries. The project focused on the analysis of popular music and musicians of the lower classes, but took into account all levels of musical culture. In the process, I examined a large number of diaries, handwritten historical materials, essays and other documents. This enabled me to clarify many points regarding the development musical culture of Japan and Austria during this era.

In my investigation of Vienna I discovered the massive unpublished diary of Matthias Perth, which allowed me to look in detail at the musical scene of Vienna around the time of the Congress of Vienna (1814-1815). This project resulted in the publication of one monograph and three scholarly papers.

研究分野：音楽学

キーワード：ウィーン 江戸 大道芸人 音楽

1. 研究開始当初の背景

日本の近世都市で活躍した大道芸の隆盛と広範な支持基盤は、これまで多くの研究者により頻りに着目されてきた。すでに1928年、朝倉無声『見世物研究』所収の諸論文は数多くの「辻芸」がとりあげられ、戦後には江戸における芸人に関する優れた研究成果が相次いで発表された(高柳金芳『江戸の大道芸』1982年、中尾健次『江戸の大道芸人』1999年など)。また都会に暮らす被差別民と門付け芸・辻芸との関わりも注目され、新たな立場から論じられてきた(高柳金芳『乞胸と江戸の大道芸』1981年、石井良助『江戸の賤民』1988年など)。下流社会の社会全体への文化的貢献を再評価する課題に取り組むことにより、近世の門付け芸・大道芸の歴史が再考されつつあるといえよう。しかし、門付け芸・辻芸を対象とする大半の研究は民俗の影響のせい、芸能自体の歴史的变化を詳しく分析した研究成果が少ない。

ヨーロッパのこの分野における研究史もそれに類似している。とりわけ戦後、ヨーロッパ各国の大道芸が研究の俎上に載せられ、中世以降の伝統芸能と差別との関係の検討によって多くの優れた成果を生んだ。なかでもドイツ語圏には大道芸の研究が豊富である(例えば Werner Danckert, Unehrlische Leute, 1963年; Guenter Boehmer, Showmen jugglers and artists: a collection of handbills of showmen of the pre-march period. Vols 1-2, 1980年; Franz Irsigler and Arnold Lasotta, Bettler und Gaukler, Dirnen und Henker: Aussenseiter in einer mittelalterlichen Stadt: Köln 1300-1600, 1989年; Sieger Köder, Narren, Gaukler, Harlekine, 1995年; Michael Liermann, Straßenkunst: Untersuchung einer theatralen Unterhaltungskunst in ihren historischen und zeitgenössischen Dimensionen, 2002年; Frank Meier, Gaukler, Dirnen, Rattenfänger, 2009年など)。

2. 研究の目的

本研究は日本近世の「門付け芸」・「辻芸」などと17~19世紀のヨーロッパ(主に音楽の盛んなオーストリアを中心に)の大道芸(Gaukler, Straßenkünstlerなどが演じた芸能)の両方の変質を検討することを主たる目的とした。これにより両都会における芸能の変化過程はもちろん、芸人の活躍を支えていた社会の変容も具体的にとらえ、芸能がどのように歴史・社会を反映しているのかをより広い視野から把握することができるのである。

日本・ヨーロッパの庶民社会とその歴史の相違点を探り、芸能が社会の中に果たしている役割をより実証的に解明し、「民間音楽文化」という現象の特殊性を明らかにし、芸能史という分野の「国際化」を促進することを目指す。申請者はすでに平成25年8~9月、オーストリアの主な博物館、美術館、図書館、資料館の所蔵品目録などの準備調査を行い、

研究の実現の可能性を確かめ、このプロジェクトはこの主題のさらなる発展を目的とした。

3. 研究の方法

日本とオーストリアのそれぞれの上流社会が支えてきた芸能に係る研究資料とは異なり、門付け芸・大道芸にかかわる研究資料の多くは収集・整理・刊行されていないので、研究は必然的に資料の発掘や整理などからはじめなければならない。また上流社会の芸能とは対照的に、門付け芸・大道芸が為政者の注目を引いたのは稀であるため、資料の性格は極めて断片的である。したがって、門付け芸・大道芸の全貌をつかみながらそれを分析するためにはなるべく多くの既刊・未刊の資料にあたり、関連箇所を抜かし整理することが研究の第一段階とならざるをえない。

研究の出発点はオーストリア(特にウィーン)の主な博物館、美術館、図書館、資料館の所蔵品の調査である。また、日本の大道芸人の実態を把握するためには国内の文書館、博物館、図書館などの資料を調査・収集することも不可欠である。そして収集された資料を解読・分析し、それぞれの社会における政治・経済的背景に音楽文化の展開を探り、大道芸人、民間音楽を作曲・演奏した者たちをはじめ、寄席、劇場、舞踏会場、屋外のスペースを提供あるいは経営した者の活躍も視野にいれなければならない。くわえて、聴衆・観客の行動と態度なども分析しなければならない。

本研究は現存する古文書、絵画資料、音響資料などによって、芸能の発展の目覚ましい近世日本と17~19世紀のオーストリアの社会、経済、文化などの実態を把握しながら、音楽文化史の立場からとりわけ門付け芸、辻芸、大道芸、あるいはその他の庶民により支えられていた音楽ジャンルの成立条件と展開を解明し、両国の音楽文化史の特徴、芸能の共通点と普遍性、芸人の果たした役割などを解明する。

4. 研究成果

この研究では主に元禄頃以降の江戸と18世紀~19世紀のウィーンの音楽文化、とくに一般社会あるいは下層階級の芸能に焦点を合わせ、史料を調査・整理した後、その分析を行った。研究を遂行にあたり、ウィーンの図書館、東京の資料館などに数多くの日記、古文書、随筆などの史料を発掘し、両市に活躍した芸人のそれぞれの実態を明らかにした。

平成26年度には、とくにオーストリアの芸能市場の発展に関する先行研究の批判的検証を行った。さらに平成26~28年度には調査範囲を本研究の核となるオーストリアの庶民が支えていた音楽の記録を収集するため、毎年夏期休暇中には8週間程度ヨーロッパに渡

り、ウィーン市立博物館 (Wien Museum)、ウィーン私立図書館 (Wienbibliothek im Rathaus)、オーストリア国立美術館 (Kunsthistorisches Museum)などを中心に資料調査を行った。すでに2013年にウィーン市立博物館には「Wiener Typen」(ウィーンの人々)と題された企画展が催され、大道芸人に関する所蔵品も多く展示され、研究者はそれを担当した学芸員との連絡を取り、相談した。

3年間にわたる調査、収集、解読、検討作業をふまえ、史料データに基づいた図表、地図、絵図、論文などを作成した。収集資料の整理、調査、解読、集計作業を通じて、設定した研究課題へ多面的なアプローチを通じて著書と論文執筆した。

ウィーンの事情を調査するに際して、未刊の資料であるマティアス・ペルトの膨大な手記を発見したことは、この研究の大きな成果のひとつといえる。19世紀初頭から半世紀にわたるウィーンの文化、経済、政治を詳しく記録するこの58巻からなる重要な史料の中から、まず1815年に開催されたウィーン会議を中心に調査した。その結果、ヨーロッパ各地よりウィーンに集まった指導者と外交官などのために、様々な催しもの、演奏会、ミサなどが上演されたことが明らかとなり、ウィーンがこのころヨーロッパの音楽文化の中心地となる実態の詳細を、目撃者の立場から具体的に把握することが可能となった。ペルトの日記の特徴の一つは、単に上流社会に発展し維持してきた音楽文化的を絞っていないことである。そこには数々の大道芸人、辻芸人、ダンス・ホールの音楽家などの活躍もいきいきと描写されている。またどのような音楽が演奏され、それに対して聴衆はどのような反応を示したかに関する記録も多い。

またウィーンの音楽文化、ことに中流社会あるいは下層の人々が楽しんできたジャンルをより具体的に把握するため、ペルトの手記以外に18世紀後半の日記も調査した。その結果、社会階級を問わずウィーンの人々がこの時期に熱中したいわゆる「ウィンナー・ワルツ」の由来と、このジャンルがウィーン文化の象徴となるまでの形成過程の詳細を明らかにすることに成功した。1774年に没した言語学者のポポヴィチが指摘したように、「ウィーンの貴族たちは回転(walzen)して踊るが、トイチ(teutsch)あるいはシュタイリシュ(steyrisch)は踊らない」と強調している。言葉を変えると、ウィーンの上流社会が踊る場合、回転はするが、田舎踊りは避けている。しかし、一般市民の場合はそうとは限らない。とりわけ復活祭の46日前の水曜日(灰の水曜日)から復活祭の前日までのファッシングの期間中にこのような踊りは多くの舞踏会で踊られた。他のヨーロッパの都市では、ファッシングの時期には市民は通常の道德感覚を緩め、仮面を付けて様々なパレードを催したり踊り狂ったりすることが一般的であった。ところがウ

ィーンの場合、特にマリア・テレシアの時代以降、治安上覆面し屋外で行動することが違法化された。その代わりに、ファッシングの時期に室内の舞踏会場で踊ったり遊んだりする風習が成立する。貴族らは王宮の仮面舞踏会へ来場した際に自分を証明し、ファッシングの踊りを楽しんだが、ヨーゼフ2世の時代となると、王宮の仮面舞踏会場は一般人にも開かれた。しかし、市民らは王宮というより、むしろ郊外にあったレストランとダンス・ホールなどを訪れ、地元の音楽家(その一部は大道芸人としても活躍した)が伴奏を提供し、若い男女が比較的自由に交際し、踊りで日常的なストレスを発散した。

一方、江戸ではすでに18世紀半ば以降、京都・大阪の文化がほぼ完全に接收され、新しいジャンルと様式が次々と生まれた。文化の大衆化が進む中、とくに寛政の改革後に伴う様々な法改正などが行われ、門付け芸人・大道芸人、香具師、寄席芸人、民間信仰に関わる芸人などとの間の競争と対立が激化した。そして、町奉行等がそれを裁くことに腐心し、そのため多くの記録が残っていることが明らかとなった。この豊富な史料を総合することによって江戸はウィーンと同様、社会の階層により音楽文化が異なることを具体的に示すことができた。しかし、同時に両市では音楽文化の商品化が著しく増加し、その結果市民の多くが同じ文化に接し、自分の町には独特な文化が存在しているという意識も次第に強化された。

この背景を詳しく述べ、江戸の種々の大道芸人の由来と彼らが支えていた音楽文化を大著にまとめ、それを2016年に学術書の出版に長い歴史を持つロンドンのラットレッジ社より刊行した。またウィーンの大道芸人を含めて、庶民に支えられたその他の音楽文化に関する学術論文3編を執筆・刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1 ジェラルド・グローマー、「マティアス・ペルトの日記に見られる1814年～1815年のウィーン会議と音楽——会議の開始まで」『山梨大学教育人間科学部紀要』第17巻2015年、253-266(査読なし)

2 ジェラルド・グローマー、「マティアス・ペルトの日記に見られる1814年～1815年のウィーン会議と音楽——その2、舞踏会とワルツ」『山梨大学教育学部紀要』第25号2016年、225-232(査読なし)

3 ジェラルド・グローマー、「マティアス・ペルトの日記に見られる1814年～1815年のウィーン会議と音楽——その2、舞踏会とワルツ(続)」『山梨大学教育学部紀要』第25号2016年、233-242(査読なし)

〔学会発表〕(計 2 件)

1 Street Culture in the Shogun's Capital, 1600-1868 オーストリア学術協会 (Oesterreichische Akademie der Wissenschaft) 2015/1/10 ウィーン(オーストリア共和国) オーストリ学術振興会

2 Oral Performance and Visual Disability in Edo-Period Japan Europäische Japan Diskurse (EJD) 2016/9/10 ウィーン(オーストリア共和国) ウィーン大学

〔図書〕(計 1 件)

1 Gerald Groemer, *Street Performers and Society in Urban Japan, 1600-1900: The Beggar's Gift*. London: Routledge, 2016 (全 410 頁)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

Gerald Groemer (GROEMER, Gerald)
山梨大学、大学院総合研究部、教授

研究者番号：50303392

(2)研究分担者

(なし)

研究者番号：

(3)連携研究者

(なし)

研究者番号：

(4)研究協力者

(なし)